連載Ⅰ
あの町この町
第54回

山の気を めしあがれ――岐阜県東白川村

ドイツ文学者・エッセイスト
池内 紀
（イラスト＝著者）

目的地は岐阜県の東白川村。もよりの駅はＪＲ高山本線白川口（しらかわぐち）駅。駅の近くに白川温泉という一軒宿があるので、そこに予約をとった。一日目は大ざっぱにまわり、二日目はポイントを決めて探訪する。いつものそんな腹づもりだった。先に宿に立ち寄り荷物を預けていくことにして、岐阜駅から電話をしたところ、妙なことを言われた。白川口駅は白川町（ちょう）であって、白川村ではない。その点、まちがえていないか？

行きたいのは東白川であって白川ではないことを伝えると、こんどは東白川村と白川村はべつの村だが、それは承知しているのかと問われた。また白川温泉は白川町にあって、白川村の温泉ではない――。

立ち寄ってわかったのだが、合掌造りで知られ、世界遺産になった白川村の観光にきて、白川口駅で下車する人がときたまいる。東白川と白川をとりちがえたケースもあれば、白川町と白川村がこんがらがったケースもある。先だっての女性五人組は、宿にきて、はじめてまちがいに気がついた。

「あちらは飛騨、こちらは美濃なんだがねェ」

いかにもリチギそうな主人が当惑顔で呟いた。「世界遺産」にとびついて、旅支度はあなたまかせでやってくる人がいるらしい。

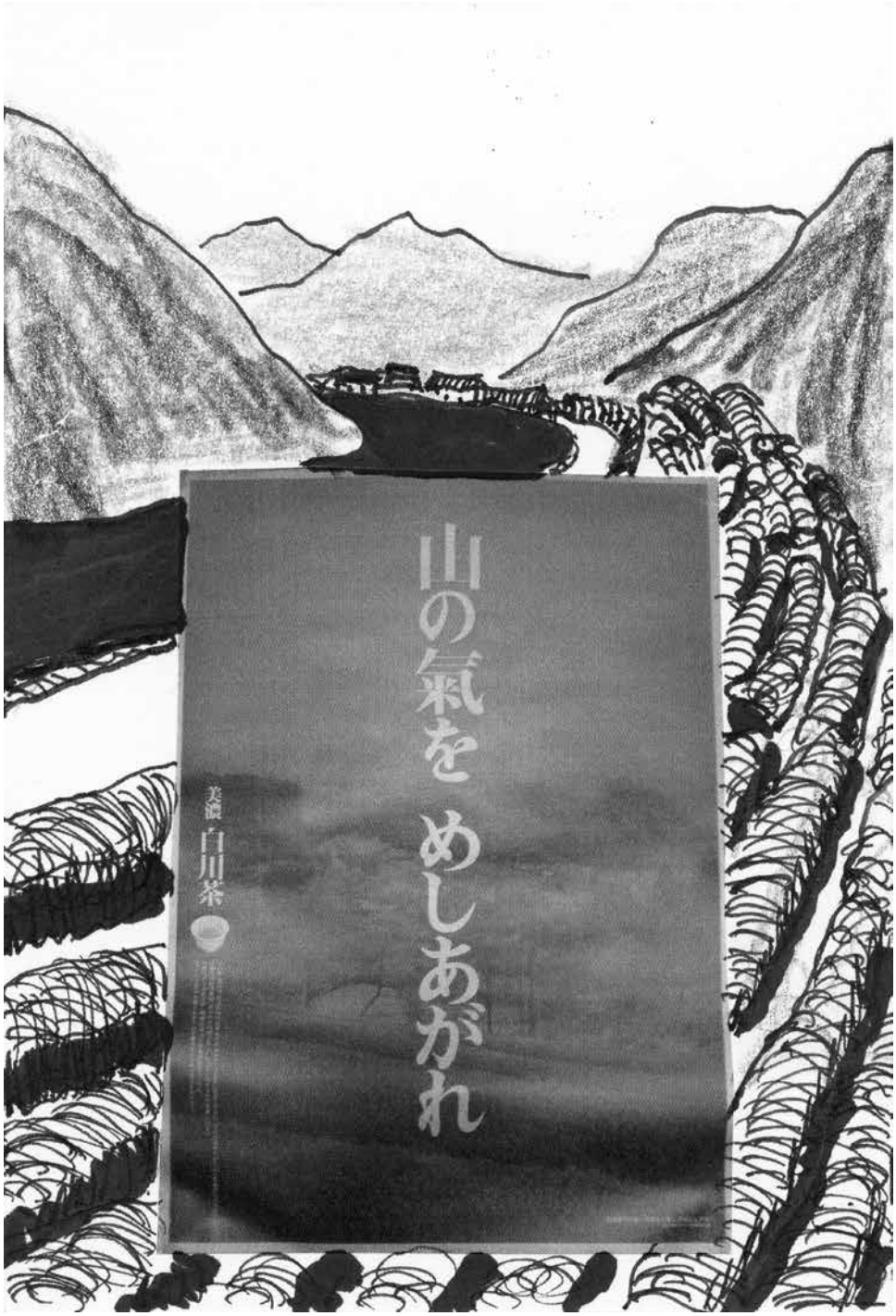
白川町は北から下ってくる飛騨川と東からの白川とが合流する地点にある。白川と隣り合って黒川、赤川が流れている。川なり水なりの色ぐあいから命名されたのだろう。川床の白い川は全国にごまんとあって、応じて「白川」の地名は多い。情報化時代にあって、それがときにヘンテコないたずらをする。

平日は一日六便、日曜は四便のバスが、白川沿いを走っていく。どこで白川町から東白川村に入ったのかはわからないが、両側の山が近づき、集落がしだいに線状になってきた。県道の両側、あるいは片側に一列つなぎになり、それがあらわれたり、消えたりする。地理学では「街路村状集落」というのではなかろうか。

東白川村のホームページには、当村が明治以来、合併も分割もせず二二〇年の歴史をもち、近年は「日本で最も美しい村連合」に加盟を認められ、「全村公園化」をめざしている、といったことが掲げてある。「日

本で最も美しい村連合」は、全国で四十数町村をかぞえ、小さくても自立をめざし、独自の行政に励んでいる。加盟にはいくつかの条件のほか、二つの特産を求められるが、東白川村は六百年の伝統をもつ白川茶とヒノキ材のブランド東濃（とうのう）ヒノキがものをいった。もう一つ「寺のない村」という特色をもつが、これは特産というわけにいかない。

村役場のすぐ前、スギとマツの古木の下に「四つ割の南無阿弥陀佛碑」がひっそりと立っている。大人の背丈にあまる大きな石に「南無阿弥陀佛」と、太々とした六文字が彫り込まれている。それだけならよくある名号



高台からの眺望

碑だが、それが十字形にたち割られている。明治初年に全国で吹き荒れた廃仏毀釈のせいである。明治新政府は「神国ニッポン」を旗じるしにして仏教を廃し、神道の国教化を強引におしすすめた。東白川村は江戸時代を通じて、中津川に近い苗木に城をもつ苗木藩に属し、旧藩主にして新知事の厳命が伝えられた。

いま村役場のあるところは、かつて常楽寺のあったところで、寺は壊され、山門わきの名号碑も四つに割られた。ほかの寺も廃寺とされて、以来、東白川村は寺のない村になった。

全国で似たような動きはあったが、どうして当地では徹底して行われたのだろう？　苗木藩は石高一万石、大名格ギリギリの小藩であって、そのためなおのこと新政府に忠勤を示そうとしたのだろうか。それとも藩政は当時、国学にそまっていたというから、ひときわ強く仏教排撃に走ったのか。あるいはまた藩の小役人がやたらとうるさいタイプで、やむなく命に従ったのか。

現在、碑は台座石の上に立っていて、ひときわ大きく見える。たしかに四つ割りのあとはあるが、六つの文字にいささかの損傷もなく、割り跡が上から下にみごとな線を引き、むしろ石の装飾であるかのようだ。

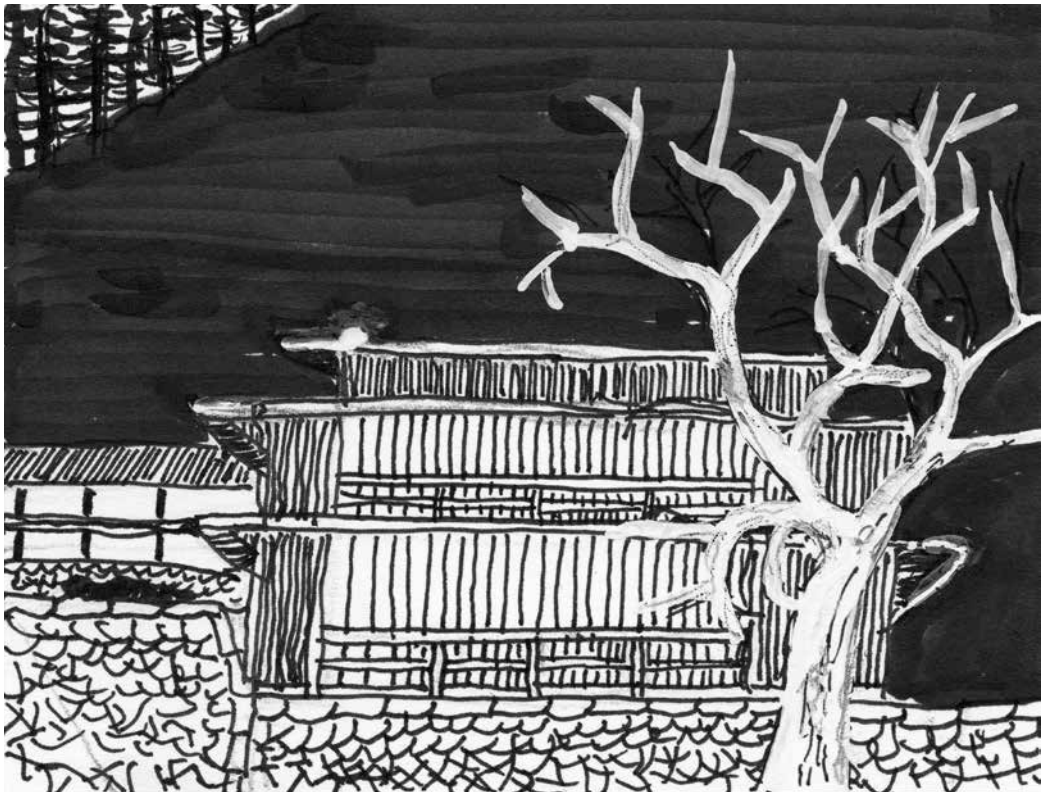
もともと天保六年（一八三五）、施主の求めにより、石工集団で知られる信州高遠の伝蔵という者が刻んだものだった。打ち砕けとの藩命が届いたとき、村は再び伝蔵を呼び、処置をゆだねた。そのとき村の長老と石工のあいだに、ひそかなやりとりがあったのではなかろうか。石には「節理」というものが走っている。自然な筋であって、これに添って割れば、全体は損なわれず、のちに合わせると元通り一つになる。四つ割りを役人に見届けさせ、池や畑の踏み石に利用。建立の百年後にあたる昭和十年（一九三五）、四散していた四片を集めて再建した。歴史の証言役はまた、村の人々のイキの長い知恵袋のことも伝えている。

村役場は逆L字型の二階建てで、棟の一方は公民館、図書室、村のケーブルテレビ。図書は自由貸し出し制で、自分で選び、自分で記載して持っていく。読書コーナー、幼い子のための遊びのコーナーを備えている。テレビ室をのぞくと、ヘッドフォンをつけた若い人が、じっとパソコンを見つめている。「自然いきいき　人のびのび　ようこそ美しい村東白川へ」。村役場主催フェスティバルのスローガンのようだ。イベント、グルメ、お買い物、遊び、それぞれプログラムが多彩である。遊びの一つに「林業機械で巨大積木ゲーム」があって、いかにも林業の里らしい。

役場前の少しうねった道は旧道で、平行して川沿いを新道が走っており、車はそちらに流れ、旧道は風のそよぎが聞こえるほど静かである。旧の宿屋に代わって今風の割烹旅館ができた。廃業した村の百貨店の建物を村が購入し、リニューアルして新しい経営方針の業者に委託した。ゆるやかな新陳代謝が起きている。旧家は陽当りのいい南斜面に石垣をつくった上にあって、前は一面の茶畑だ。ヒノキ材をふんだんに使った母屋と離れ、地形に応じたみごとな石積み、整然と畝をつくって並ぶ茶の木の列、自然と人の手と歳月とがつくり出した調和のとれた風景は息をのむほど美しい。

通りの水路を澄んだ水が流れている。ところどころが四角い水槽になっていて、かつて山間の暮らしのタンパク源として魚が飼育されていたのだろう。軒の風鈴がちいさな音を立てている。軒端に屋号マークが彫り抜いてあって、山ガタと二つの円が木工作品と言いたいほど風雅である。通り全体が木の文化のあとをとどめている。

白川をはさみ南と北に一〇〇〇メートルクラスの山がつらなっている。江戸時代からヒノキの良木で知られてきた。現在の地図では隣町白川町



母屋と離れと石垣

経由で美濃加茂に出るのが一番の早道だが、それは白川と飛騨川の合流点に白川橋が架せられてからのこと。土木遺産に選ばれている巨大なワイヤーの橋は、大正十五年（一九二六）にできた。それまでは白川沿いに下ってくると、大きな深い合流点に阻まれて飛騨街道に出ることができない。東白川村が山向こうの苗木藩に属したのも、そんな地形のせいだろう。明治以後もながらく美濃よりも中津川から馬籠につづく信州と縁が深かったのではあるまいか。隣り合った白川町と合併せず、ときにそそっかしい旅行者を迷わせるのは、つちかわれてきた風土のちがいがあってのことではなかろうか。

旧道と新道の合わさるところの橋向こうに「鮎ヶ瀬公園」の標示が見えたので寄ってみた。四阿（あずまや）、散索道入口、展望台、以上おわり。何もない山に道をつけ、大きな櫓（やぐら）のような展望台をつくった。ほかに駐車場と無人の管理事務所。つくってはみたが人の訪れのない施設に特有の荒寥感が漂っている。

農林水産省補助事業
事業主体：東白川村

わきに小さく「美しいむらづくり特別対策事業／農村総合整備モデル事業」とついている。いつのことか、こんな名目で予算がつき、ハコモノ工事が進行した。橋ぎわは瀬になっていて、鮎もいるだろうから「鮎ヶ瀬公園」と命名。開園式には県幹部、農水省役人が駆けつけてテープカットをしたと思われる。

村当局は、この手の事業の無意味さを痛感したにちがいない。「鮎ヶ瀬公園案内図」は孤影悄然と古びているが、「わくわく体験ランド　こもれびの里」は標識もパンフレットも新しく、いきいきしている。東白川村おこし会社の傘下にあって、株式会社ふるさと企画・こもれびの館

の運営。もう国の村策事業費のおこぼれなどアテにしない。にわかづくりの公園で人を呼ぶなんてつまらない。それよりも工夫して、村の住人がいろんな体験をしながら、たのしく暮らす道はないものか。もともと、とてもステキなお茶と清流とヒノキの里なのだ。自分たちでイキのいいふるさとをつくる。えたいの知れない「農村総合整備モデル事業」などとは、おサラバ――。

パン作り、本格ピザ作り、手打ちうどん作り、五平もち作り、朴葉（ほおば）ずし作り、栗きんとん作り……。ピザは苦手でも、朴葉すしならお手のもののおばあさんがいる。五平もちの達人じいさんもいる。おとなりは栗きんとんならおまかせ。村には隠れ名人がどっさりいるのだ。株式会社ふるさと企画の要請に応じて軽トラでコーチ役に日参してくれる。陶芸・木の皿作り、草木染め、焼き杉アート、東濃ヒノキの木工……。

「材料は自然からの贈り物

世界にひとつ自分だけの作品」

グループで宿泊できる。六十名まで可。宿泊、三七七五円、食事、一〇五〇円、チェックイン15：00、チェックアウト10：00、囲炉裏の間もあって、グループ同士で歓談ができる。

「すべての体験は、完成までスタッフがお世話しますのでどなたでも出来ます」

ふるさと企画は、「つちのこ館」というのも運営している。幻の動物つちのこをめぐっては、東白川生棲説が強いのだ。幻のイキモノも同じことなら、ゆたかな水と澄んだ大気の山里に棲みたいではないか。

つちのこ館以外にも第三セクターなどで、魚の宿、白川茶屋、木造モデル住宅、道の駅に付属して茶の里野菜村を運営している。管理はふるさと企画のほかに「新世紀工房」「てんとうむしガーデン組合」、ＮＰＯ法人「青空見聞塾」。そういった命名からして若い人たちの発案と運営にちがいない。女性たちも負けていないのだ。「村のおばちゃん」たちが立ち上げた白川茶屋の名物は白川茶御膳と朴葉ずし定食。（管）は「東白川村農業婦人美味作」。ワイワイ話し合っているなかで生まれた名称だろう。古名をなぞってユーモアの味づけがしてある。

東白川には古くからの農村歌舞伎が伝わっている。昨年秋の公演には小学の部が「浮世柄比翼稲妻（うきよづかひよくのいなづま）」、小中学校の先生の部が「白波五人男」、一般の部が「奥州安達ヶ原三段目」などを演じて、やんやの喝采をあび、おひねりが乱れ飛んだ。図書室のアルバムで拝見したが、山里の菊五郎や吉右衛門が目を剥いてミエをきっている。小学生の玉三郎は水もしたたるお姫さまだ。舞台、意匠とも伝統を伝えて華やかだ。

村役場のやや西かたに、城跡のような石垣がのこされている。県道から段々畑状に茶畑がかさなっており、急坂をのぼりつめると石仏の並ぶ正面の石段わきに出る。「蟠龍寺跡（ばんりゅうじ）」といって、かつてそこには臨済宗の寺があった。開基はわからないが、江戸中期に再建の文書で伝わっている。聖観音をいただいて、檀家旧七カ村に及んだという。これも廃仏毀釈で取り壊されたと思うところだが、実はそうではなく、当時の廃寺リストに蟠龍寺は入っていない。その前に何らかの理由で住職が去り、村方が自主的に寺を廃寺にした。そんな珍しいケースとされている。

そして石垣がのこった。大きく二段式の横造で、面積一二〇〇平方メートル。斜面を利用した幾何学的な石垣は名号碑と同じく、信州高遠の石工の手になったという。大工事であって、けっこう歳月をかけたと思うが、ここでも信州との交流が見てとれる。

跡地もまた二面の茶畑で、無機的な石積みとモッコリしたお茶の木が斜面にひろがり、不思議な絵模様を描いている。

蟠龍寺跡

高台にあるので眺望がいい。白川がゆるやかに湾曲し、県道と街路村状集落とが同じカーブで、寄りそって西にのびている。さらに何重もの茶畑の列と山並みが背後に控え、上に遠くの山の峰がのぞいている。さらに上に雲、西の空に落ちかけた太陽。大きなスケールをもったパノラマだが、人間の暮らしが自然のなかに生み出した景観であって、大きくてもタワー式の建物のように人を威嚇したりせず、言いようのないやさしさでつつみこんでくる。

「広報ひがししらかわ」は月ごとに「戸籍の窓」で「誕生おめでとうございます」「お悔やみ申し上げます」の名前と集落を告げている。月によってバラつきがあるが、お悔やみの方が多いようだ。「人口の動き」のところに「先月と比較して2人減」「昨年と比較して40人減」が明示されている。二〇一二年末の人口二六〇〇人あまり。

記録は大切、しかし数にとらわれて一喜一憂することはない。経済性一辺倒の政治のなかでは、ことあるごとに数字が意味ありげに言われるが、それは単なる記号にすぎず、どんなに逆立ちしても数字が希望や、やすらぎを生み出すことはない。それは暮らしの知恵をていねいに受け継ぐなかで、おのずと生まれてくる神さまのゴホービなのだ。

東白川村は歩くとなんとも気持がいい。空気がきれいで、風の音、小鳥の声、川音が代わるがわる聞こえてくる。そのうち気がついたが、何よりも余分なものがないせいだろう。ないものねだりよりも、あるものを大切に生かして村づくりをしている。

「山の気を　めしあがれ」

美濃・白川茶の広告だが、ここにも余分なものが一切ない。すすめられるままに大きく深呼吸して、山の気をたっぷりいただいた。

（いけうち　おさむ）